

## 東欧の子どもたちと幼児教育(3)

# マケドニアから平和を

杉本 裕子

### はじめに

壁が私たちの国のまわりをすっかりとり囲んでいるような気がすることがあります。嵐は吹き込んでこなにかわりに、視界も遮られています。

しかし世界各地で起きていることの報告は何という凄まじさでしようか。人間が為すことの事実から、私は自分がいかに隔たっていたのかを思わずにいられます。

せん。ホロコーストはナチスドイツに終わった事ではなく、現在拡大進行形の現実です。もはや人間として異常な事態だと驚いている段階でさえないので。人間はこういうことをするのだと、五十年前、いえ、五十年前にすでに冷徹に認めているべきだったのでしようか。

しかも私は自分の内にそれを「わかる」と思う心の動きがあるのではないでしようか？ この悲惨とどこ

か似ている情景を自分の内に思い描いたことはなかったでしょうか？ 自分は決して、何があるかとそのような悪事には加担しないと言い切れるでしょうか？ 歴史の中で繰り返されてきた殺戮は、ごく少数の狂人が引き起こした不幸な事故であって、まさか私がそういうことに関わることなどありえない……でしょうか？ もしありえないと断言できないのであれば、そんな危うい自分でありながら、一体どうして「保育者」などといって子どもそばにできることができるでしょう……？

そのようなことを思い惑っていた頃、昨夏のことですが、私はなんとあのバルカン半島から、横浜で行われたO M E P 世界大会に参加される方々にお会いすることになりました。ブルガリアのディミトロフさん、ユーゴスラビアのペジッチさんそしてマケドニアのオルガ・ムルゼバ・シュカーリッチさん（スコピエ大学哲学部 バルカン平和研究センター）です。

動乱のさなかから来られる人達と何を話せばいいの



▲右から、シュカーリッチ女史、ディミトロフ氏、ペジッチ女史、筆者

だろうと、私は緊張して待っていたのですが、成田に到着されたこの三人の人はそれぞれに明るく、落ち着いて、自由な雰囲気を漂わせていました。

さて今回はそのマケドニア共和国から来られたシュカーリッチさんが第二十一回 O M E P 世界大会で発表されたレポート「平和の文化はユーロピアではない」をご紹介します。

シュカーリッチさんはとてもエネルギーが豊富な人です。今も世界の各地で行われている平和と文化の会議などに飛び回っていますが、O M E P 世界大会に来日中も、一瞬の暇も惜しむ様にして動き回っていました。それも、観光などはあさで置いて、とにかく人と会って話したい、世界中の人と友達になるためにこそ私はわざわざ来た、一人一人が直接友達になることがとても大事なんだと何度も話していました。女史のこの熱意と、そしてマケドニアという国の社会の背景を考えながらこのレポートを読むと大変興味深いと思

います。

『東欧を知る事典』（伊藤隆之他監修 平凡社）の「マケドニア」をひくと、常に近隣諸国がマケドニア人を民族として承認しないという状況にあって、「一体自分たちは何者なのか」というアイデンティティの確認作業がこの社会を特徴づけているとも言え、教育やマスコミの傾向もそういった方向に国民の目を向けるよう、教訓的な言説が幅をきかせている、とあります。

ところがシュカーリッチさんは「一国家の国民としてのアイデンティティや愛国主義というものは、現代の平和のための教育にとっては無意味なもの」と断言して憚りません。女史のような考え方はこの国を代表する意見とは言えないのかも知れません。しかしだからこそ、そのような声がなぜあがってくるのか、聴いてみたいと思います。

\*

## 「平和の文化はユートピアではない」

平和の文化というときの「平和」は、戦争を終結させることや、戦争を防ぐために為されること、またあらゆる直接的な暴力の不在という意味での消極的平和だけではなく、一人一人の人に対する積極的平和に向けての教育をも意味するのです。

平和教育のポイントのひとつは、問題の解決や葛藤を非暴力的・創造的アプローチを用いて解消していくトレーニングです。

「暴力は学習される」のであれば、教育において非暴力を取り上げていき、人々のうちに、暴力以外に取り得る方法がある、積極的平和を築く可能性があるのだという確信を抱かせることが必要です。

平和教育のプログラムとしては次のようなものが考えられます。

◇権力・武力に対抗するものとして、公正・真実・自

由・平等・民主主義などの価値を教え、非暴力の真面目を正しく評価させる

◇問題・葛藤の連携的・協力的解決方法の学習において、相互交渉と、「双方共に勝ちの解決法」(win-win solution)を訓練する

◇教育の場は非暴力的集団として、積極的な個人の肯定、対話、共同学習などが推進され、命令や競争的課題は抑制される

◇教育課程に人間の感情や社会事象に関する内容を含める

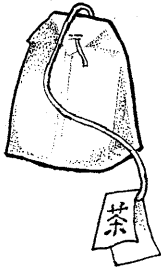
### 〈活動内容例〉

- ・生徒間のつながりを強め、落ち着いた肯定的な雰囲気をもたらすための導入活動
- ・相互の信頼と尊敬を進めるための活動
- ・自己評価を進めるための活動
- ・自己開示を進めるための活動
- ・コミュニケーションにおける自己主張の仕方
- ・問題の原因とタイプ分析

・コミュニケーションを妨げるものとそれを克服して  
いく方法

家庭・地域・職場などにおいてこのようなプログラ  
ムを通じて、共感する力、積極的に聴く力、相互的・  
協同的な問題解決の力などを、早い時期から育て、養  
成し続けていく必要があります。

しかし、これらのプログラムは、階級・性別・人種  
などの社会的不平等や抑圧が行なわれている場合に  
は、一概に有効であるとは言えません。その場合はそ  
れぞれの条件に応じた特別仕様のカリキュラムを組む  
ことが必要であるし、また同時に教師の側のより積極



的な訓練が必要となります。

そしてこの社会においても、根深い不平等な関係  
——性差別——が存在します。

就学前児童の平和と戦争の概念に関する一連の調査  
(マケドニア共和国では、一九八六・一九九一・一九  
九二・一九九三年。ベオグラードでは、一九九一年)  
からは、子どもたちがTVの画面やラジオから流れて  
くる戦争の様々な光景に、無防備に、無配慮にさらさ  
れていることがわかります。子どもたちの遊びはリア  
ルな戦争ごっことなり、遊びらしさを失いました。子  
どもたちは自分たちの間の衝突を、直接行動に訴えた  
り、相手に服従を求めることで解決しようとしていま  
した。これは子どもたちが日々目にしている大人どう  
しのやり方と同じです。子どもたちは平和を「戦争が  
ないこと」だと思っており、また平穏であること、  
人々が仲良くしていることだと表現しました。  
「敵」として挙げられる名前も変わってきています。

一九八六年にはトルコ人とドイツ人。これは第二次世界大戦の人民解放戦争からきています。一九九一年になると、過去の敵と現在交戦状態にある国々との混同が見られました。子どもたちは誰が誰と、何時どこで、そしてなぜ戦っているのか、よくわからないでいたということがわかります。一九九二年にはボスニア・ヘルツェゴビナで戦っている、現在の国家指導者と将校の名が挙げられました。

ところが一九九三年にスコピエの幼稚園で私は愉快的な発見をしました。この子どもたちは過去のものも、現在のものも、戦争について何も知らなかったのです。子どもたちは、マケドニアはとても平和なところで、この国には敵なんかいないと話していました。一体どういうことでしょうか？

自国で起きた多くの悲惨な出来事と、経済的な孤立状態のなかで、人々は家族と共にいかに生きぬくかということだけを考えるようになっていたのです。戦争のことなど、見たり聴いたり話したりする時間を割く

ことをやめてしまいました。人々は家庭において、身の回りの小さな、個人的な出来事について、今までにもまして話し合うようになりました。大人と子どもとの間でも、もっと相手のいうことに注意深く耳を傾け、相手を受け入れようとする前向きな雰囲気のおかげ、協力的な活動や遊びがなされるようになりました。この時子どもたちが考えていた「戦争」とは、自分たちが毎日の生活のなかで悩んでいる人間関係や、家族との間での葛藤のことでした。

このことからこの時代の、この社会において私たちが抛り所とすべき価値観が、現実の生活のなかから浮かび上がり、明らかになってきたことがわかります。

幼い子どもたちにとって平和な歴史というものの実際は、家庭や地域での子どもたちの日常生活そのものです。子どもの自分自身の親密な世界のことです。ですから私たち大人が子どもに与える情報が、子どもたちをあまり感情的に動揺させたり、何が起るかかわらないという不安に圧倒させたりしてはなりません。

「戦争が起きるの？」という問いには、「大人たちは皆戦争などがあってはならないということと一致しているのだ」ということになるでしょう。信頼する大人に守られ、安心していられるということは、子どもにとって基本的なことです。安心感とオプティミズムが、何よりもまずこの不安な世界の子どもたちに与えられねばなりません。

平和の文化とは、大人にとっても子どもにとっても、自分の身の回りの具体的な日常生活のなかで為されていくひとつひとつの創造的な問題解決と、平等で公正な人間関係の上に築かれる現実的な生涯事業なのであって、決してユートピアではないのです。

\*  
(私訳による要約)

このレポートを読むと、私はシュカリーリッチさんが平和の文化を実現させることにおいて、どれほど教育に希望を託しているかを感じます。教育に希望を託するということは、人間の事実を冷徹に見つめながらも、人

間への信頼を保っていく精神のバランス感覚を必要とすることなのではないでしょうか。いえ、単なるバランスというよりは、絶望的に破壊的な方向への強い衝動を持つ存在でありながらなお、平和を希求していく意志を持ち続けるという、矛盾する方向性を人間存在の内に止揚していく、そういう強靱な精神の働きが必要なのでしょう。シュカリーリッチさんが「オプティミズムが必要だ」と言ったのは、この精神の強さのことかもしれません。自分自身の危うさを意識すればするほど平和を望む思いも強くなるのではないのでしょうか。

女史は「(平和への) 試みにおいて必要な事は、信じ、希望を抱き、愛すること。よりよい変化のために忍耐する献身、民主主義的権利に伴う責任を各自が果たすこと」であると言っています。私は歴史のはじめから、風よけになるような壁など何もなかった国の人々が、こんなにも明快に希望を語っていることで、我にかえるような気がしました。

(保育研究グループ「はるにれ」)